

## 子どもの発達に及ぼす身体拘束的保育用品の影響<sup>1</sup>

筑波大学大学院(博)心理学研究科 村野井 均

筑波大学心理学系 杉原 一 昭

Effects of restrictive nurturing tools on the development of children

Hitoshi Muranoi and Kazuaki Sugihara (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305*)

Effects of nurturing tools on the physiological and psychological development of children were studied. The subjects were 614 nursery school children (6 years old or below) and 127 babies (1 year and 6 months old). The main results were following. (1) The restrictive nurturing tools, such as baby bagee, walking chair and baby-rack, tend to disturb the development of voluntary behaviors of children. (2) Walking chair is not only ineffective in acceleration of walking ability but sometimes even retards the beginning of solitary walking of children. The negative effects of nurturing tools on the development of children is against the popularity of those tools among parents and the parents are needed to know the facts about how their babies develop.

Key words : voluntary behaviors, education of mother, nurturing tools, solitary walking, walking chairs, knowledge of baby development.

### 問題の所在

育児という活動は現代に至るまで、家庭の中でごく自然に営まれる母親の行為であった。それは誰もが行なってきたことであり、とりたてて言うほど難しいことではないとされてきた。しかし、最近では子どもの体つきのおかしさ、遊べなさ、落ちつきのなさや、身のまわりの自立の遅れ等、子どもの身体的・運動的及び心理的発達の変異が小児保健や体育学などの関係者から指摘されている。(佐々木, 1982; 正木, 1979, 1980; 鈴木, 1980)。

心理学の立場からも、10ヶ月乳児健康診断(以下、健診と略す)や1歳6ヶ月児健診に携わる中で、子どもに現われる発達の遅れや軽い障害が、子ども自身に問題があるために生じるというよりは、子どもを取りまく生活環境の変化や悪化によって引き起こされているのではないかと考えるようになってきた(初塚, 1982; 松倉ら, 1982; 佐藤, 1981)。特に子どもの発達に対する母親の知識不足や自分の子どもの発達に関心を示さない親の存在は、母親だから、あるいは女性だから子どもが育てられるはずである

という従来の考え方に対し、疑義を感じさせるのに充分である(上田, 1980)。

実際に母一子を扱い、健康と成長に責任を持つ小児保健や小児医学の分野では、すでに、妊婦健診において生まれてくる子どもの体型を教え、新生児健診では子どもの抱き方を教え、4ヶ月乳児健診ではおむつのあて方を指導している。子どもの体型を教える理由は、股関節脱臼を防ぐためである。股関節脱臼は10年ほど前までは先天性股関節脱臼と言われ、先天性という名称が示す通り遺伝病の一種であると考えられていた。その理由は、思春期に第2次性徴とともに股関節が痛み出し、歩行に困難をきたすようになるため、性染色体に関連した障害であると考えられていたためである。ところが、この障害は実は新生児期に足の動きを拘束するようなおむつのあて方をするために、股関節がうまく入らないままに成長し、関節の軟骨部が摩り減る頃に痛み出すことが明らかにされた。したがって、それ以後、新生児の自然な体型を教え、「みっともない」という理由で足を閉じる巻きおむつを使用することをやめさせ、股おむつに代えるように指導することになったのである。この指導により、股関節脱臼の発生率は5.4%から0.4%へと約10分の一に減少したと石井(1975)は報告している。それと同時に、病名から「先天性」という部分が抹消されることになったの

1 この調査に御協力いただいた茨城県桜村教育委員会と保育所課、および、横浜市港北保育所、ならびに桜村の保母さんの研究会である「さくらんぼ会」のみなさんに感謝いたします。

である。子どもの抱き方を教える理由は、生後4ヶ月前の首が座っていない子どもを抱く時は、首の座った後の子どもと違って、頭を支えてやらなければならないという些細な注意をするためである。この他、保健所では離乳食を与える時期や離乳食とはどんなものなのか、あるいは時期ごとに子どもはどのように発達してゆくのか、さらにはミルクの量や歯のみがき方まで多種多様なことを教えている。障害の早期発見・早期治療を目的に制定されたこれら健診システムは、当初の目的を果たしつつ、さらに育児相談および母親教育の場として重要な位置を占めつつあるのである。

なぜ母親に赤ん坊の形から離乳食の時期まで教えるようになったのかと言うと、その理由の一つは、現代の女性の多くは子どもから切り離されて育てているためであろう。特に中学・高校の時代には受験のためほとんど乳幼児に接することなしに過ごすわけであり、就職した後も、多くの場合は子どもと話す機会もないままに結婚し、出産を迎えることになっているのである。

したがって、多くの母親は子どもというものをほとんど知らず、非常に初歩的な知識から教える必要があるのである。1歳半になっても離乳食を与えずミルクを1000cc与えている親や、言葉は自然に出てくると思い言葉をけをしなかつたら初語が「マンマ」や「ブーブー」ではなく(Bixler, R. et al 1958; 村田, 1977)、「オイシイ」であった事例など、枚挙にいとまがないほど正常ではない育児をする親がいるのである。かつて、女性が特別な指導を受けることなしに子どもを育てられたのは、子守りなどの手伝いや、母あるいは祖母からの育児文化の伝承があったためと考えられるのである。

このような事実はエソロジーの分野では比較的早くから明らかにされていた。たとえば社会から隔離されて育てられたサルは、正常な育児行動だけでなく性行動さえもできなかったのである(Harlow, 1971)。これは本能的に行なうと思われていた行動(育児、性)が実はサル社会の中で学習しなければならぬものであったことを示している。サルよりもっと社会的な存在である人間が知識や経験なしに育児できないことは当然であると言ってよいであろう。

育児知識の伝達が、育児書、保健所、保育園に依存するように、育児用の道具も各種商品に依存するようになっている。確かに保育用品の多くは、親の心配を軽減させたり、手間を省いたり、あるいは発達をより進めるための合理的側面を持っている。しかし一部には発達的に見て疑問を持たざるを得ない

ものも見られる。荒川ら(1980)は、各種保育用品に対して安全面や身体発達への懸念をまとめているが、実証的データは示していない。また、心理面の発達という視点から見た場合、安全性とは違った形の懸念が生じてくる(村野井, 1982)。荒川らのとりあげた保育用品について成長・発達両面の問題点をまとめると次のようになる。

#### ・紙おむつ

紙おむつは吸湿性が良いため、排便・排尿をしてもすぐに吸収され、不快感を感じる事が少ない。それが紙おむつの効用とされている。しかし吸湿性がよい、不快感を与えないということがかえって湿ったままのおむつをしつづけることになり、あせもや湿疹になりやすくしていると言われている。発達のな問題としては、トイレット・トレーニングに与える影響が心配されている。すなわち、排便をしたときに気持ちが悪くて泣き、その声を聞いた保育者がおむつを取り替えてくれてさっぱりする。これがトイレット・トレーニングの基礎となる快・不快の原点といわれている。ところが紙おむつの使用は不快感を少なくするため、このサイクルの確立する時期を遅らすと言われている。三歳児健診で最近みられる遺糞(ウンチ・パンツ)と関係があるのではないとも言われている。したがっておむつの使用は旅行、入院等の一時的使用に限った方がよいという主張も出されている。

#### ・ベビーバギー、ラック類

バギー、ラック類は身動きできないような狭い所に子どもを入れ、ベルトで腰を締めるため、その使用によって子どもの運動能力の発達が遅れることや、体が地面と水平な状態が基本となるべき時期に坐位をとらせるため、脊椎への悪影響があるのではないとも言われている。千葉県鎌ヶ谷の10ヶ月健診において、それに相当する事例が現われている。A君は手とひざで体を支える高バイができて、生後10ヶ月になってもまだお腹を床にすりつけて移動する腹バイを行なう。それも、足の左右の協応がないため手と胸で進む。坐位をとらせ、目の前におもちゃを置き、坐位からハイハイへの移動の様子を見ると、足が腹部でねじれても痛がらず、足を抜こうとはしなかった。上肢に問題は見られず、母指対向、両手把握とも可であった。精神発達面でも、名前を呼ばれて振り向く、「頂だい」と手を出すや物を渡す、細かい物を拾いたがる等はすべて可能であった。母親は、家族の人数が多いため家事が忙がしく、ベルトを締めたままラックに座らせっぱなしにしていると述べていた。このように、バギー、ラック類に子どもをしぼりつけておくことは、いわば乳児期から

感覚遮断を行なっているようなものである。保育園でも、0、1才児が家庭から通園を始める4～5月頃に、坐位のままずっと動かない子や、机から物が落ちて自分で取ろうとしない子が見られ、バギー、ラック類への乗せっぱなし、入れっぱなしされているためではないかと推測されている。

・ドーナツ枕

乳児期の子どもには枕は不要であり、せいぜいタオルを敷く程度でよいと言われている。わざわざ枕を使って段差をつけることは脊椎の発育に悪影響を及ぼすのではないかとされている。精神的発達の面では、頭が固定されるため、人の声や物音のする方向を自由に見ることができず、人が近づいてくれば人の顔も見られない状態におかれることになる。枕は長時間使う物なのでその影響も大きいと考えられる。

・グローブ

グローブは、乳児の爪がのびた時にこれをはめて、顔を引っかいたりしないようにする保育用品である。しかし、自由に動かせる身体器官が比較的少ない乳児にとって、手は重要な感覚器官である。感覚運動期とも言われるこの時期に、手先の感覚を奪うことは子どもにより影響を及ぼすとは考えられない。

・つなぎのベビーウェア

つなぎのベビーウェアは身体の動きを拘束し、特に誕生直後の使用は、先程述べた股関節脱臼の原因になるとも言われている。ただし、保健所によっては、上下に分かれたベビーウェアを認めている所もある。

・歩行器

歩行器については多方面から見直しがなされている。転倒・転落による事故が問題になるだけでなく、つま先歩きや、最近見られるハイハイしない子どもの原因の一つではないかと言われている。また、近頃の子どもは転びやすいことも指摘されているが、その原因の一つが、乳児期における歩行器の使用ではないとも言われている。

これらの保育用品の使用は、子どもの身体・運動面の発達だけではなく、かれらの性格形成にどのような影響を与えているのであろうか。最近の子どもに見られる自発性のなさやイライラ、あるいは軽い情緒障害とこれらの保育用品の使用は関連があるのではないだろうか。

調査 I 保育用品の使用と子どもの発達の関係

1 目 的

子どもの体つきのおかしさや最近の子どもに見られる性格の特異な特徴が、生活環境の中で作り出されてくるものであるという考え方に立つ場合、様々な原因を考えることができる。ここでは、乳幼児期の子どもの身体や性格に影響を与えることが懸念されている保育用品をとりあげ、子どもの自発性のなさやイライラ、あるいは軽い情緒障害とどのような関連があるのかを調べる。それによって、前述した懸念の妥当性を検討する。

2 方 法

被調査者は茨城県新治郡桜村の公立保育園全6園と公立幼稚園のうち2園、計8園に通うすべての園児である。調査用紙は各クラスの担任の保母・先生を通して園児に配布し、保護者に記入を求めた。調査

Table1 保育用品の使用状況

保育用品	使用状況		使 用		不 使 用		不 明	
	時期		4～5ヶ月以前	4～5ヶ月以後	4～5ヶ月以前	4～5ヶ月以後	4～5ヶ月以前	4～5ヶ月以後
紙 お む つ			77	133	534	478	3	3
ラ ッ ク			285	229	326	382	3	3
ベビーバギー			88	220	523	391	3	3
ドーナツ枕			193	54	417	555	4	5
グ ロ ー ブ			155	14	455	595	4	5
つなぎのベビーウェア			368	341	239	266	7	7
保育用品	時期		8～9ヶ月以前	8～9ヶ月以後	8～9ヶ月以前	8～9ヶ月以後	8～9ヶ月以前	8～9ヶ月以後
	歩 行 器		246	219	360	387	8	8

(数値は人数)

用紙の配布は1981年10月1日から6日であり、回収は10月8日から16日の間であった。回収数は614、回収率は80.3%であった。年齢別の内訳は、0歳児5名、1歳児19名、2歳児34名、3歳児71名、4歳児150名、5歳児224名、6歳児111名、計614名である。調査項目は、保育用品の使用状況、子どもの現在と過去の性格、およびハイハイ・一人立ちの時期である(附表1参照)。保育用品のうち、紙おむつは湿り気を最も感じさせないことを商業ポイントとしている商品について、また、ラックについては様々な名称があるため、最も一般的と思われる名称を用いて尋ねた。子どもの性格項目は、最近の子どもに目立つと言われる性格と、軽い情緒障害児が乳幼児期によく示すと言われる特性性格を選んだ。

### 3 結果と考察

#### 1 保育用品の使用状況

各保育用品の使用状況は Table 1 に示す通りである。使用時期を4～5ヶ月以前と以後に分けたのは、首が坐る前と後では保育用品の使用が子どもに与える影響に差が出ると考えられたためである。また、歩行器だけは同様な理由からひとり立ちを始める8～9ヶ月以前と以後に分けてある。

まず、紙おむつについては4～5ヶ月以前に12.5%、以後では21.7%の子どもが使用している。比較資料が今のところ無いため、はっきりしたことは言えないが、予想より低い値である。この理由は、紙おむつをイメージしやすくするために特定の商品名で代表させたため、他の紙おむつを使用している親が記入しなかったことが考えられる。

次にベビーバギーは4～5ヶ月以前では14%しか使われていないが、4～5ヶ月以後では36%に増加している。これは、外出する機会が多くなることや、子どもの体重が増えて重くなるためバギーに頼るようになるためと思われる。ラック・バギー類に比べて、ドーナツ枕やグローブ、つなぎのベビーウェアは長時間に渡って使用される保育用品である。つなぎのベビーウェアは4～5ヶ月以前、以後とも半数以上が使用している。調査用紙の回答を見ると一日中使用していたというケースが4～5ヶ月以前に21人、以後には19人存在していた。歩行器は8～9ヶ月以前で40.1%、以後では35.7%が使用していた。両時期とも歩行器の使用者は半数には満たなかったが、歩行器が歩行のおかしさなどのような関係にあるのかという点については後述する。

#### 2 子どもの性格

Table 2 子どもの性格

性格項目	選択肢	あてはまる	ややあてはまる	あてはまらない	わからない	不明
甘える		312	262	23	1	16
イライラしている		21	164	347	39	43
園へ行くのをいやがる		13	104	468	4	25
自分から進んでやろうとしない		54	277	237	19	27
すぐあきらめる		54	253	233	49	25

(数値は人数)

Table 3 子どもの過去の様子

性格項目	選択肢	あてはまる	ややあてはまる	あてはまらない	わからない	不明
育てやすかった		323	175	86	13	17
よく言葉がけをしてやった		356	173	40	20	25
異常におとなしかった		27	85	465	13	24
視線が合わなかった		8	16	533	24	33
発話がおそかった		33	79	463	15	24
あまり泣かなかった		104	149	319	16	26
周囲の人に対して無関心だった		6	35	514	30	29

(数値は人数)

Table 4 子どもの性格と保育用品の相互関係

性格項目	紙おむつ		ラック		ベビーバギー		ドーナツ枕		グローブ		歩行器	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
イライラしている							***	***	*			
園へ行くのを嫌がる	*											
自分から進んでやろうとしない				***	*	***			*		*	
異常におとなしかった		** <sup>(注)</sup>										
視線があわなかった							***					
発話が遅かった							*					
あまり泣かなかった							***					***
周囲の人に対して無関心だった												***

\* P < .05  
 \*\* P < .01  
 \*\*\* P < .005

(注) 紙おむつを4～5ヶ月以後に使用した子は、不使用児に比べておとなしい子が少ないという結果が出た。このみ他の結果とは逆になっている。

保護者（主に母親）が子どもの現在の性格をどのようにみなしているのかを Table 2 に、そして子どもの過去の様子をどうとらえているのかを Table 3 に示す。

わが子を「イライラしている」や「園へ行くのをいやがる。」と報告している母親は、それぞれ21人（3.4%）と13人（2.1%）である。また、「自分から進んでやろうとしない」、つまり自発性がないという項目については、「あてはまる」が54人（8.8%）だが、「ややあてはまる」までを含めると53.9%となり、半分以上の子どもが自発性がないと母親から評価されていることになる。同様のことは「すぐあきらめる」という性格項目についても言うことができ、「あてはまる」が54人（8.8%）であり、「ややあてはまる」までを入れると50.0%となる。保護者の目から見ると、現代の子どもは自発性がなく、根気もないということになる。

次に子どもを育てる過程で感じた、子どもの過去の様子をみると、「育てやすかった」の項目は「あてはまる」が323人（52.6%）おり、「ややあてはまる」までを含めると499人（81.8%）にもなる（Table 3 参照）。最近、自閉的な子どもや発達障害のある子どもの生育歴を調べると「育てやすい子だった」という回想が多いと言われているが、今回の調査では8割以上の子どもがそれにあたっている。したがって、ただ単に「育てやすかった」と言うだけで、自閉症児や軽い情緒障害を見つけ出すチェックポイントと

なるかどうかは、大いに疑問の持たれるところであり、育てやすさの中身について詳しく検討する必要がある。自閉的傾向のある子に多く見られる「異常におとなしかった」、「視線が合わなかった」、「周囲の人に対して無関心だった」という項目への回答は1～4%出現している。（Table 3 参照）。他項目については、比較すべき資料がないため頻度を記すにとどめる。

### 3 保育用品の使用と子どもの性格との関連について

保育用品の使用と子どもの性格との関連について調べるため、まず、子どもの性格項目について、「あてはまる」と「ややあてはまる」をまとめて『あり群』とし、「あてはまらない」を『なし群』と2分した。そしてこの2群と、保育用品の使用、不使用について2×2の $\chi^2$ 検定を行なった。 $\chi^2$ 検定の結果を Table 4 に示す。Table 4 に掲げてある項目以外のものは有意な関連が認められなかったため除外した。

この Table より、ラック、ベビーバギー、グローブ、歩行器という、身体を拘束する保育用品が、「自分から進んでやろうとしない」という項目、つまり自発性のなさを意味する項目と統計的に有意に関連していることが分かる。この結果は、荒川ら（1980）の懸念を統計学的に確認したと言ってもよいであろう。特に、ラック、バギーは、首の坐る4～5ヶ月以後に使用した場合、自発性の無さと強い関連がみ

Table 5 歩行器の使用とハイハイ・一人立ちの関係

分類	使用時期	前期使用 (8~9ヶ月未満)	後期使用 (8~9ヶ月以後)	両時期とも 使用	両時期不使用	計
ハイハイをあまりしない		1	1	2	0	4
ハイハイなし		3	6	0	6	15
同時期		5	0	0	2	7
逆転		3	0	3	1	7
小計		12	7	5	9	33
総人数		158	131	88	229	606

(数値は人数)

られる。このことから、首が坐り、身体全体を使って動き始めようとする時期にラック、バギー等を使って、子どもの身体活動を拘束することは子どもの自発性を押えてしまうと言われているかもしれない。

Table 4 からもう1つ言えることは、ドーナツ枕の使用と性格項目の関連である。ドーナツ枕の使用が「イライラ」や「視線が合わない」「発話が遅い」「あまり泣かなかった」という自閉的傾向を示す項目と強い関連が見られる。ただし、なぜこのような結果が生じるのか、つまり、首に段差をつけるのが原因で脊椎に悪影響を及ぼしているのか、それとも頭が固定されるため、声のする方を向いたり、首を自由に動かすことができないためにこのような性格が生じてくるのか、今回の調査から断定することはできない。

#### 4-1 歩行器の使用と子どもの性格との関連

次に歩行器について少し詳しく述べてみたい。前述したとおり、この調査では歩行器の使用は一人立ちの始まる8~9ヶ月以前と以後に分けている。表4より、8~9ヶ月以前に歩行器を使用すると「自分から進んでやろうとしない」という項目に有意な関連が見られ、8~9ヶ月以後では「あまり泣かなかった」「周囲の人に対して無関心だった」という項目に強い関連が現われている。「自分から進んでやろうとしない」ことは、歩行器に入れられた状態の子どもが手を伸ばしても欲しい物に触れたり手に取ったりすることができず、保護者がその物を与えてくれるまで待つか、あるいはあきらめるしかないことを考えれば、両者に有意な関連があることの理由の一端が理解できよう。もう少し足腰が強くなれば歩行器から身を乗り出して外に出ようとするが、このようにして歩行器ごと転倒するケースが転倒原因のうち54.4% (重複回答) を占めていることが荒川

(1981) により報告されている。

つまり、環境への関心の高まりが歩行器ごと転倒してケガをする結果を引き起こすのである。したがって、歩行器自体をどんなに安全な素材で作っても、重心を下げて倒れにくくしても、また JISマークや SGマークが付こうとも、子どもが歩行器から出ようとする限り、転倒事故は起こり続けると言えよう。そして、転倒事故を防ぐために子どもが歩行器から出ようとするのを押えようとするれば、歩行器は身体拘束の度合いをますます強めざるを得なくなる。したがって歩行器はなぜ必要なのか、何に役立つのか、今やその存在理由が問われていると言え

Table 6 一人立ちの時期と歩行器の使用・不使用

月齢	群	不使用	使用	計
5ヶ月		1	0	1
6ヶ月		1	0	1
7ヶ月		2	2	4
8ヶ月		14	3	17
9ヶ月		8	3	11
10ヶ月		12	8	20
11ヶ月		16	12	28
12ヶ月		10	7	17
13ヶ月		7	6	13
14ヶ月		2	1	3
15ヶ月		0	3	3
16ヶ月		0	1	1
17ヶ月		0	0	0
18ヶ月		0	1	1
計		73	47	120
平均(SD)		10.2(1.9)	11.3(2.3)	10.6(2.1)

(数値は人数。7名は記入もれ。)

よう。

#### 4-2 歩行器の使用とハイハイ・一人立ちとの関係

今回の調査では、ハイハイの時期と一人立ちの時期を尋ねている。月齢を数字で記入する欄があるだけなのにもかかわらず、「ハイハイをしなかった」あるいは「ハイハイをあまりしなかった」と保護者が書き込んである例がかなりあった。そこで、ハイハイから一人立ちへの順次性が逆転している、又は、同時期にみられる例を集め、歩行器の使用との関連を見たものが Table 5 である。分類の定義は次の通りである。

〔ハイハイをしなかった〕……月齢を記入する欄に「ハイハイをしなかった」と書き込んである例。

〔ハイハイをあまりしない〕……月齢を記入する欄に「ハイハイをあまりしなかった」と書き込んである例。

〔逆転〕……ハイハイを始めた月齢と一人立ち始めた月齢が逆転している例。つまり、ハイハイをする前に一人立ちを始めた例。

〔同時期〕……ハイハイを始めた月齢と一人立ち始めた月齢が同じである例。

これらには記入もれ等はいっさい含まれていない。Table 5 より、上の例のような歩行の順次性が異常になる例を示した子どもは、606 人（8 人不明）のうち 33 人、つまり 5.5% 存在していることがわかる。特に、「両時期とも歩行器不使用」の場合、歩行のおかしさの出現率は 3.9% であるのに対し、「前期のみ使用」の場合は出現率 7.6% と約 2 倍になっている。統計的に有意ではなかったが、歩行の順次性に悪い影響を及ぼしていることが示唆される。

使用時期別にその特徴を見てゆくと、前期のみ使用した場合は 12 例のうち、「同時期」あるいは「逆転」が 8 例もあり、ハイハイと一人立ちの順次性に問題が強く現われると言えよう。すなわち、歩行器を 8~9 ヶ月以前に使用することは、両手両足を使ってハイハイすべき時期に、子どもを直立させ、二足歩行を強いていると言えるのである。これに対し、後期のみ使用した場合は、順次性に関する問題は全く生じていない、そのかわり「ハイハイをしなかった」が 6 例、「あまりしなかった」が 1 例生じている。つまり、ハイハイの量的側面に問題が生じやすいということが言えよう。これは、後期に使用した子どもが、ハイハイをしないうでいきなり立ち、その後も全くハイハイをしないケースが多いことを示している。ただし、「ハイハイ」をしなかった事例は、後期使用群の 4.6% に比べると低い値ではあるが、前期使用群にも 3 例（1.9%）、両時期不使用群にも

6 例（2.6%）現われているため、歩行器後期使用群とハイハイの有無との関連について明言することはできない。また、歩行器を使用していなくともハイハイをしなかったり、歩行の順次性が逆転している例が若干みられるが、この点については、部屋数や部屋の広さ等を考慮しなければならないと思われる。

以上より、歩行器の使用は子どもの性格や歩行の順次性のおかしさと関連があることが示唆されている。では、それにもかかわらず歩行器の使用は子どもの歩行の練習に役立ち、歩行の時期を早める効果を持つのであろうか、この点を確かめるために調査 II を行なった。

#### 調査 II 歩行器の使用と一人立ちの時期との関係 目的

歩行器の使用は実際に歩行の練習に役立ち、歩行の時期を早める効果を持つのであろうか。歩行を開始して間もない 1 歳 6 ヶ月児を対象に、歩行器使用群と不使用群の間の一人立ち開始時期を比較することを目的とする。

#### 方法

被調査者は、横浜市港北保健所の 1 歳半児健診を受診に来所した乳児 127 名である。1 歳半健診時に、対象児一人につき一枚の調査用紙（附表 2）を配布し、保護者に記入を求めた。実施日は、1982 年 1 月 14 日ならびに 28 日で、用紙は即日回収した。なお、この調査自体は子どもの生活リズムおよび父親との接触度を調べることを目的としたものであり、歩行に関する項目はその一部である（松倉ら 1982）。

#### 結果と考察

一人立ちの時期と歩行器の使用・不使用についてまとめたものが Table 6 である。歩行器不使用群が一人立ちを行なった時期は平均 10.2 ヶ月、SD は 1.9 ヶ月である。これに対し、歩行器使用群は平均 11.3 ヶ月、SD は 2.3 ヶ月であった。使用群は不使用群に比べ、一人立ちの時期が 1 ヶ月以上遅れ、個人差も大きいことがわかる。両群の平均値の差を見るために t 検定を行なったところ 1% 水準で有意差が現われた ( $t=2.88$ ,  $df=118$ ,  $P<.01$ )。つまり、歩行器を使用すると一人立ちの時期は有意に遅くなるという結果が出たのである。また、Table 6 を見ればわかるように、一人立ちの時期が生後 15 ヶ月以後の子どもは全て歩行器使用群であった。

一般的には歩行器を使用する子どもが早い時期に歩き出すと期待されているが、実際にはそのような例は、ハイハイをせずに立ったり、つま先立ち歩きのようなおかしな歩き方をする場合が多いのではな

いだろうか。つまり、早く歩き出す子は、歩行に必要な足腰や背筋の力をつけてから歩いているのではなく、歩行器という環境にまで順応してしまった“過適応児”であると言えるかもしれない。

#### 全体的考察

以上2つの調査より、歩行器はいったい何のために存在しているのか、その理由が分からなくなっていると言えよう。歩行器は、けっして「歩行を促す」利点を持っていないばかりか、ハイハイと一人立ちの順次性を狂わせ、さらには転倒事故をひき起し、それを防ごうとすれば子どもの身体活動を拘束するばかりで、その結果、「自発性のない」子どもを育ててしまうのである。実際のところ、歩行器は荒川ら(1981)の指摘にもあるように、家が狭くて子どもに這いまわられると邪魔な場合や兄妹が部屋で遊びまわるので危なくて子どもを寝かせておけないという場合に使われているのではないだろうか。「子どものため」というよりは「親のため」の保育用品であるといえよう。したがって「歩行」器などと歩行に関係があるかのような名称を使わずに「捕効」器(子どもを捕えておくことに有効な器具)とすべきであろう。

このように、発達心理学の見地から見ても、小児保健学の見地から見ても歩行器は子どもにとって有害無益な存在であるといえそうである。しかし、保育園の設置基準ではブランコやすべり台とともに、設置を義務づけられている備品と規定されている。保育園では歩行器を使用することはないが、根拠のはっきりしない歩行器の設置基準は再考する時期に来たと言えよう。

さらに、他の保育用品においても、必ずしも子どもの発達を念頭において作られているのではないということが示唆された。特に、身体を拘束する保育用品に関しては、保育園や保健所で懸念されている問題を数量的・統計的に確認できたと思われる。ともあれ、子どもを育てる親自身がこれらの保育用品の子どもに与える影響を見抜けず、単に外見上の合理性や便利さによって使用していたり、子どもの発達への影響に気づく前に買わされている状態にあると言えよう。

#### 要約

近ごろの子どもに現われる体つきのおかしさや落ちつきなさ、身辺自立の遅れ、あるいは軽い情緒障害が、子ども自身に問題があるために生じると考えるのではなく、子どもを取りまく生活環境の急激な変化や悪化によって引き起されると考えた場合、

環境の中の何が子どものおかしさの原因となっているのか調べてゆく必要がある。今回の研究では、乳児健康診断において、特に母親指導がなされる身体拘束的保育用品が、子どもの性格や身体発達に及ぼす影響を発達心理学的観点から調査することを目的に行なわれた。

被験者は614名の保育園児・幼稚園児(0から6歳)および127名の1歳半児である。

主要な結果は次の通りである。

- 1 ベビーバギー、歩行器、ラック等の身体拘束的保育用品は、子どもの自発性をおさえる。特に首坐りが出来て腹パイを始める時期にこれらの保育用品を使用すると影響が大きい。
- 2 歩行器は性格面への影響があるだけでなく、ハイハイをする前に一人立ちをしたり、ハイハイをしない等、身体発達の順次性への悪影響が現われた。そして歩行器を使用した群は不使用群に比べ有意に歩行開始の時期が遅れることが示された。

以上のことより、保育用品が必ずしも子どもの発達を念頭において作られているのではないこと、特に歩行器は歩行にとってなんの利益ももたらさないことが示された。そして、親自身が保育用品の子どもに与える影響を見抜けずに外見上の合理性や便利さによって使用していることが明らかにされた。

#### 引用文献

- 荒川信子・田中歌子・柳沢尚子 1980 育児用品の見直し(第3報)地域保健, 11, 5-64
- 荒川信子 1981 歩行器に関する最近の状況 地域保健, 12, 60-72
- Bixler, R. & Yearger, H. 1958 It may have begun with "mama", *Psychological Reports.*, 4, 471-475
- 初塚真喜子 1982 発達遅滞児の生活環境について 第46回日本心理学会発表論文集, 231
- ハーロウ, H. F., 浜田寿美男(訳) 1978 愛のなりたち ミネルヴァ書房(Harlow, H. F. 1971 *Learning to Love* California: Albin).
- 石井勝正 1975 指導の手引き 助産婦, 29, 12-19.
- 正木健夫 1979 子どもの体力 国民文庫
- 正木健夫 1980 日本の子ども・青年のからだ調査—「乳幼児のからだ」アンケート報告書— 日本体育大学体育研究所所報, 6, 1-24.
- 松倉信濃・村野井均 1982 1才半児の生活実態調査 第24回日本教育心理学会発表論文集, 362-365.
- 村野井均 1982 歩行器の使用とハイハイ・一人立ちの時期について 第46回日本心理学会発表論



- 文集, 231.
- 村田孝次 1977 言語発達の心理学 培風館, 117-127.
- 佐々木保行 1982 育児ノイローゼ 佐々木保行編著 有斐閣新書
- 佐藤益子 1981 1歳6ヶ月児健診に見られる発達と環境因子の分析 児童学研究, 12, 1-10.
- 鈴木淑子 1980 幼児の言語に関する調査 保健の科学, 22, 57-61.
- 上田礼子 1980 乳幼児の事故と被虐待について——加害と被災の関係から—— 保健の科学, 22, 476-480.
- 1982. 9. 30 受稿 ——

附表1 調査Iの調査項目(抜粋)

3. 現在のお子さんの健康状態について、該当するものに○をつけて下さい。

(いくつでもよい)

アレルギー(牛乳, 卵, アトピー, その他) 虫歯(処置歯 本, 未処置歯 本)  
 指しゃぶり 皮膚がかさかさ カゼをひきやすい よく「疲れた」と言う 近視  
 乱視 貧血 肥満 やせすぎ 鼻血(よくある, たまにある)  
 ヌルヌルをいやがる ブランコからよく落ちる こ関節脱きゅう  
 その他( )

○ お子さんの、はいはいと一人立ちの時期を教えてください。  
 はいはい( 年 月) 一人立ち( 年 月)

6. 保育用品

○ お使いになった保育用品について、表に御記入願います。

保育用品	時期 使用状況	4 ~ 5 ヶ月以前		4 ~ 5 ヶ月以後	
		使用したもの (○印)	使用時間 (1日平均)	使用したもの (○印)	使用時間 (1日平均)
紙 お む つ ラ ツ ク ベ ビ ー バ ギ ー ド ー ナ ツ ま く ら グ ロ ー ブ(※注) つなぎのベビーウェア					
歩行器		8 ~ 9 ヶ月以前		8 ~ 9 ヶ月以後	

(※注) グローブとは、子どもを寝かせているときに子どもがつめで顔をひっかいたり  
 しないよう、手にはめさせる手袋のことです。

7. 子どもの性格

○ お子さんの性格について、現在該当する箇所に○印をつけて下さい。

甘える	ある	少しある	ない	わからない
イライラしている	ある	少しある	ない	わからない
園へ行くのをいやがる	ある	少しある	ない	わからない
自分から進んでやろうとしない	ある	少しある	ない	わからない
すぐあきらめる	ある	少しある	ない	わからない

○ 過去をふりかえてみて、お子さんにあてはまる箇所に○印をつけて下さい。

育てやすかった	あてはまる	ややあてはまる	あてはまらない	わからない
よく言葉かけをしてやった	あてはまる	ややあてはまる	あてはまらない	わからない
異常におとなしかった	あてはまる	ややあてはまる	あてはまらない	わからない
視線が合わなかった	あてはまる	ややあてはまる	あてはまらない	わからない
発話がおそかった	あてはまる	ややあてはまる	あてはまらない	わからない
あまり泣かなかった	あてはまる	ややあてはまる	あてはまらない	わからない
周囲の人に対して無関心 だった	あてはまる	ややあてはまる	あてはまらない	わからない



c. きのお子さんは何回うちをしましたか。

(                    回)

それは何時頃ですか。

(午前                    時頃  
午後                    時頃)

d. お子さんはきのう食事のとき何を食べましたか。またその時刻とかかった時間(分)をお書き下さい。

時間	朝食 ( 時)( 分間)	昼食 ( 時)( 分間)	夕食 ( 時)( 分間)
主 食			
副 食			

e. きのおやつを食べましたか。

いいえ                    はい (                    回) (食べたもの )

f. お子さんによく一緒に遊ぶ友だちはいますか。

いいえ                    はい (                    人)

3. 子どもの遊びについて

a. どんなおもちゃで遊びますか。

1. ブロック
2. ミニカー
3. ままごとセット
4. 人形
5. むいぐるみ
6. その他 (                    )

b. 何をして遊ぶのが好きですか。

(                    )

c. 絵本を持っていますか。

いいえ                    はい (                    冊くらい)

4. 赤ちゃん時代のことについて

a. 歩行器は使用していましたか。

いいえ                    はい (                    ケ月～                    ケ月頃)

b. ハイハイはしましたか。

いいえ                    はい (                    ケ月～                    ケ月頃)

c. 一人立ちをしたのはいつですか。

(                    ケ月頃)

d. ドーナツまくらを使用しましたか。

いいえ                    はい ( 1. 5ケ月以前                    2. 5ケ月以後)